令和２年度

# 大町市立美麻小中学校 第三者評価報告書

令和３年１月19日
（令和２年度）

一般社団法人麻布教育研究所
村瀬公胤

0　本報告書について……2

Ⅰ　総評……3

1．総合評定……3

2．総合評価……3

Ⅱ　各項目評価の構成……4

Ⅲ　評価根拠一覧……5

Ⅳ　各項目評価……6

1．義務教育学校としての目標管理の状況……6

2．教育課程管理の状況……8

3．家庭・地域との協働の状況……10

## 0　本報告書について

### 1. 本報告書の位置づけ

本報告書は、学校教育法第42条及び第43条に基づき、文部科学省「学校評価ガイドライン〔平成28年改訂〕」に沿いながら、大町市「学校評価ガイドライン（令和2年策定）」（以下、「大町市ガイドライン」）の（5）に示された「美麻小中学校における第三者評価の試行」について実施した、大町市立美麻小中学校の第三者評価を報告するものである。

### 2. 本報告書の構成

本書の構成は以下の通りである。

| | |
|---|---|
| Ⅰ 総評 | 第三者評価の総合結果を報告する。 |
| Ⅱ 各評価項目の構成 | 各評価項目をどのように構成したかを示す。 |
| Ⅲ 評価根拠一覧 | 第三者評価の根拠となった資料を示す。 |
| Ⅳ 各評価項目 | 大町市ガイドラインに沿って各評価項目について報告する。 |

### 3. 本報告書の考え方

第三者評価は、1）専門性を持っている視点と、2）関係者とは異なる立場の視点が要請されている。つまり、自己評価や学校関係者評価と性格の異なる評価として、これらに屋上屋を架すことのないような留意が必要である。その点を考慮して、以下の方針で第三者評価に臨んだ。

1）教育学的視点

報告者の専門である教育学の視点から、美麻小中学校の教育活動及び学校運営の質について評価する。とくに、各項目評価においては、「今後の課題」として専門的見地からの助言に努める。

2）異なる立場の視点

自己評価と学校関係者評価について、それぞれの評価内容を第三者の立場から検討するのみならず、これら評価システムの全体が十全に機能するよう運営されているかどうかについて評価するよう努める。

## Ⅰ　総評

### 1. 総合評定

S

### 2. 総合評価

大町市立美麻小中学校の教育活動と学校運営、及び、自己評価と学校関係者評価の運営は、高い水準にあり、特筆すべき優れた点もあると認め、これを報告する。

後述する各項目評価の評定結果を要約すると、1）義務教育学校としての目標管理の状況は、ＡＡＢＡであり、2）教育課程管理の状況は、ＳＳＳＡであり、3）家庭・地域との協働の状況はＳＳＳである。総合するに、学校運営は水準に達しており、教育活動は授業の質、特別支援教育の充実などにおいて特に優れた取り組みがなされていた。また、家庭・地域との協働では、学校運営協議会が優れて機能していること、教育課程が地域に根ざして運営されていること、家庭・地域との協力関係が充実していることなど、特に優れた点が多くある。以上のことから、総合評定をＳとした。

## Ⅱ　各項目評価の構成

### 1. 評価の考え方と構成

第Ⅳ節の各項目の評価は、大町市ガイドラインに掲載された各項目を小節タイトルとし、その下に同ガイドラインに例示された内容を小さいフォントで示したのちに、「評定」「評価」「今後の課題」「根拠」で構成する。

### 2. 評定について

各項目の評価結果を要約して示す評定について、A（教育活動及び学校運営、並びに、評価システムの機能に関する各項目について、求められる水準に達している）を中心に、S（特筆すべき優れた点がある）とB（水準に満たない点がある）を置いてS-A-Bの３段階で設計した。第三者評価である本報告は、専門性及び第三者の視点からの評価であることから、細かい評定よりも、水準に達しているかどうかをわかりやすく表記することが必要であり、また関係者が意識していなかった優れた点や不備のある点について省察を促すよう焦点を当てることが重要であると考え、この３段階とした。

### 3. 評価について

各項目評価について、本評価者が評価活動を通してどのような点に注目し、どのような点を優れているまたは水準を満たしていないと評価したのか、詳述する。

### 4. 今後の課題について

評価から見出された今後の課題について記す。

### 5. 根拠について

当該項目の評価の根拠となった資料等は何であったのか、第Ⅲ節に示す「評価根拠一覧」より選択して記す。

## Ⅲ　評価根拠一覧

各項目評価にあたって、根拠となった資料等を一覧で示す。

◇ 『ガイドライン：2019年度学校マネジメント 個の生き方や考え方を尊重する学校づくり』（以下、『ガイドライン』と記す）

・「グランドデザイン」を含む

◇ 『自己評価：「心と体をひらいて学ぶ美麻の子」（令和2年度学校マネジメント学校運営協議会資料）』（以下、『自己評価』と記す）

・「令和2年度自己評価」および

・「令和2年度魅力ある学校づくり評価シート」を含む

◇ 「美麻小中学校カリキュラムマップ」（以下、「カリキュラムマップ」と記す）

◇ 「ミッション探索カード」

◇ 「第2回美麻学校運営協議会議事次第」

・「名簿」、

・「資料」および

・「2020年度美麻小中学校学校支援計画　実施中間報告」を含む

◇ HP

・学校HP（http://miasa.city-omachi.ed.jp/）

・美麻Wiki（http://miasa.info/index.php）

◇ 「広報みあさづくり通信」（月刊；美麻Wikiより取得）

◇ 授業参観（2020年7月10日および12月11日）

◇ 学校運営協議会参観（2020年12月11日）

◇ 関係者インタビュー（2020年7月10日および12月11日）

・学校管理職、地域学校協働コーディネーターを含む

## Ⅳ　各項目評価

### １．義務教育学校としての目標管理の状況

#### １．１　組織運営の状況

・校長の経営ビジョンにより、職員は教員としての使命感をもって教育活動を行っている。

・校長と副校長のリーダーシップにより校務分掌が機能し、組織的な運営・責任体制が整備されている。

**評定**：A

**評価**：本校の経営ビジョンは『ガイドライン』に明快に記され、共有されている。また、「ミッション探索カード」によって、校長、副校長と対話的にミッションが共有され、各教員が省察しつつ、自己課題をもって実践に取り組んでいることがうかがわれる。この自己課題に多様性が認められることから、これらの課題が教員各自の必要感に添って設定されていると考えられる。

**今後の課題**：自己課題が各自の必要感に根ざしていることを今後も大切にしながら、より具体的な言葉で表現できるような挑戦にも期待したい。一方、管理職についても「ミッション探索カード」のようなツールを用いて、相互にミッションを確認し合うような試みがあってもよいかもしれない。とくに副校長職は、校種をまたぐ義務教育学校の要でもある。実際に優れたマネジメントをしているだろうと推察されるので、その職務と成果の「見える化」を図ることが、今度の本校の発展に寄与すると考えられる。

**根拠**：『ガイドライン』、「ミッション探索カード」、授業参観（7月、12月）

#### １．２　学校と設置者の連携の状況

・設置者が示す教育方針に基づいて学校は教育目標を設定し、教育活動その他の運営を行っている。

・学校が課題と考える事項について設置者と共通理解が図られている。

**評定**：A

**評価**：「自己評価」内の「魅力ある学校づくり評価シート」は適切に機能していた。課題が実態に即していること、改善策が具体的であることの２点において、本項目の要求水準を満たしていると考える。また、改善すべき点がまだ必ずしも改善しきれていないことが読み取れることも、本シートが機能するための必須要件であり、その点からも望ましい姿であると判断した。

**今後の課題**：改善できていないことも明らかにする姿勢は、今後も大切にしていただきたい。一方で、改善策が「意識」に偏りがちなことに留意する必要がある。改善は、意識の向上や変革だけでなく、「ツール」（モノ）と「仕掛け」（コト）でも可能な道筋があるかもしれない。そうしたアプローチにも挑戦してほしい。

**根拠**：『自己評価』（「魅力ある学校づくり評価シート」）

### 1．3　設定と自己評価の状況

・学校は育成したい資質・能力をグランドデザインでわかりやすく表している。

・学校は小中一貫教育の目的に照らして教育課題とその解決に向けた重点目標を明らかにしている。

・自己評価の項目は、学校の重点目標を踏まえたものになっている。

**評定**：B

**評価**：「グランドデザイン」において、重点目標はおおむね適切な抽象度で設定されており、「魅力ある学校づくり評価シート」と連動している。ただし、「重点１　学びづくり」については、「グランドデザイン」と「魅力ある学校づくり評価シート」の記述で整合性がとれていない部分があった。双方の表記が必ず一致しているべきかどうかについては、関係者の判断にまかせたいが、あえて一致させないのであれば、重点１だけでなく、重点２や３も同様にずらした書き方にしたほうが読み手に理解しやすいと考えられる。

**今後の課題**：上述の通り、表記について検討していただきたい。なお、本評定は、外形上の観点から今年度はＢとしてあるが、一致についての見解が明らかになれば、内容面で問題はない。事実上のＡとして考えていただいてけっこうであることを付言する。

**根拠**：『ガイドライン』（「グランドデザイン」）、『自己評価』（「魅力ある学校づくり評価シート」）

### 1．4　学校運営協議会における学校関係者評価の状況

・学校運営協議会委員に自己評価の結果を検討する過程を保障する中で学校関係者評価を実施している。

・学校関係者評価の結果が学校の次年度の経営ビジョンに反映されている。

**評定**：A

**評価**：12 月の学校運営協議会を中心に、学校運営協議会委員は、学校の自己評価について意見を述べる機会が保障されている。また、その成果が次年度の『ガイドライン』に反映されるサイクルが確立している。

**今後の課題**：より密接な意見の交換のために、学校運営協議会という会合と前後して、学校と学校運営協議会委員が対話する他の方途もありうるのか、可能性についても検討されたい。

**根拠**：『ガイドライン』、『自己評価』、学校運営協議会（12 月）の参観、管理職およびコーディネーターへのインタビュー

## ２．教育課程管理の状況

### ２．１　カリキュラム・マネジメントの状況

・教育目標と児童生徒の発達段階を踏まえて教科等横断的な教育課程が編成・実施され、その考え方がカリキュラム文書を通して職員間で共有されている。

・ＰＤＣＡサイクルに基づき、児童生徒の学力・体力の状況を把握しながら教育課程が適切に管理されている。

**評定**：S

**評価**：一貫校の強みを活かし、ホップ期（1～4 年生）・ステップ期（5～7 年生）・ジャンプ期（8～9 年生）それぞれにどのような能力を培うのかについて、『ガイドライン』で明確に示され、それに基づいて教育課程が編成されている。総合的な学習の時間、生活科、キャリア教育がカリキュラムの結節点として位置づけられることによって、そうした編成がより効果的になるように設計されている。これらを一覧するツールとして「カリキュラムマップ」が作成されている点は、特筆に値する。

**今後の課題**：教科横断で培われた力はどのように検証されるのか、本校ならではの思考ツールなどを用いた今後の研究に期待する。

**根拠**：『ガイドライン』、「カリキュラムマップ」

### ２．２　授業の状況

・資質・能力を育成するための授業の質的改善が進んでおり、対話を基盤とした深い学びが日常的に行われている。

・授業や教材の開発に外部人材を活用し、児童生徒の思考力・判断力・表現力や見方・考え方を育てようとしている。

**評定**：S

**評価**：「個の生き方や考え方を尊重する学校づくり」の理念の下、授業の中で児童生徒たちは深く考え、聞き合う姿で学んでいた。低学年では自らの思いをしっかり表現する姿があり、高学年になるにしたがって深く思考する姿を認めることができる。これらはすべて、対話を基盤としている授業のデザインによるものと思われる。また、生活科や総合的な学習の時間をはじめとして、積極的に地域の方々に参加していただきながら、「真正な学び(authentic learning)」の実現が為されている点も、本校の誇るべき成果と言ってよいだろう。

**今後の課題**：主体的・対話的で深い学びの実現のためのアプローチは、多様である。それゆえ、授業のスタイルも、パターンの踏襲よりも創発的な日々の挑戦が求められる。

小規模校である本校の強みを活かすならば、教員同士の相互参観は当然として、さらに学年ブロックや教科をまたいででも、従来の枠組みを超えたTTなど意欲的な授業の構想が、今後あってもよいかもしれない。たとえば、算数を専門とする低学年担任と社会科を専門とする高学年の教員が、ペアを組んで、低学年と高学年が学び合うような異学年の協働の学びを試みる等々、様々な形態が考えられる。けっしてTTをせよということではないが、教員どうしの交流は重要である。

**根拠**：授業参観（7月、12月）

## 2．3　特別支援教育の状況

・特別な支援を必要とする児童生徒について、個別の指導計画や個別の教育支援計画が適切に作成されている。

・インクルーシブ教育の理念が学校に息づいており、特別な支援を必要とする児童生徒が生き生きと学校生活を送っている。

**評定**：S

**評価**：教室で児童生徒たちがお互いの言葉を深く聴く姿こそ、すべての児童生徒がたしかにケアされていることの証左である。評価者のわずかな授業参観からも、発達の特性としてきわめて多様な児童生徒たちを教室に認めることができた。彼・彼女らが、自分らしさを失うことなく、朗らかに学んでいることの幸せをかみしめたい。こうした実態には、コーディネーターが細やかに個別の指導計画や個別の教育支援計画を作成しながら、校内での指導体制の共有がはかられていることを、インタビューにて聴き取った。

**今後の課題**：対人関係のトラブルと捉えられている事象の中に、じつは児童生徒の認知の特性に由来する困り感が隠れているのではないだろうか。「トラブルをなくす」とともに、「何に困っているのか」についての視点を得るために、特別支援教育について、より高度な研修が今後必要になってくるだろう。一方、本校の強みとして、地域の方々が学習に深く参与していただいていることがある。であるならば、子どもの見立てについて、地域の方々から学ぶ機会もあってもよいのかもしれない。

**根拠**：授業参観（7月、12月）、インタビュー

## 2．4　教職員の研修の状況

・職員の研修課題を明らかにするシステムが構築されており、職員は自主的・自律的に研修を進めている。

**評定**：A

**評価**：「ミッション探索カード」に基づいて自己課題を追究する課題研修と、ブロック

会および年4回のカリキュラム研修による全体研修が設けられており、研修システムが安定的に運用されている。

**今後の課題**:本校の授業スタイルと研修システムが安定してきたからこその問題かもしれないが、創発性が今後の課題になると思われる。平たく言えば、「授業研究が楽しいかどうか」である。本校の学びが、「やらなければいけないもの」になった瞬間から、上述のシステムは安定してなお機能不全に陥ることがあり得る。その視点から考えて、本校に着任して間もない教員の支え方も問題になる。このような問題を克服する方途は、児童生徒と同じく「協働の学び」にある。項目2．2とも関係することだが、授業づくりを個人の意識や力量に依存させすぎていないか、省みることも必要である。いまこそ、授業づくりをともに楽しむ文化の醸成が本校には求められている。要点は、「すべての教員が協働の学びの授業ができるようにする」のではなく、「すべての教員が協働参画して創発的な授業に挑戦する」ことができるかどうかである。

**根拠**:「ミッション探索カード」、『ガイドライン』、授業参観（7月、12月）

## 3．家庭・地域との協働の状況

### 3．1　学校運営協議会の学校の課題への関与の状況

・学校運営協議会で学校の課題が取り上げられ、委員が積極的に解決のためのアイディアを提案している。

・校長とコーディネーターは課題の解決の状況について日常的に懇談している。

**評定**：S

**評価**:学校運営協議会を通じて、家庭・地域と学校の協働は高い水準で実現されている。今年度12月の協議会では、1）グループ協議を新たに取り入れ、2）委員から、学習活動について具体的かつ本質的な質問があり、3）学校教員代表との積極的な対話がなされていた。また、協議会のメンバー構成も宛て職を避け、日頃より様々な角度から学校に関わる人材で構成していることも望ましいと思われる。特筆すべきものとしては、この協議会の資料として作成された「美麻小中学校教育用語集」がある。これは地域からの要望に応える形で作成されたもので、協議会でも委員から好評を得ていた。実際に、本校の教育の理解に貴重な貢献をしていると推察される内容であるとともに、この作成自体が、教員側にも自らの実践を振り返る機会になるとも考えられ、意義の高い試みと言えよう。

**今後の課題**:運営協議会が充実すればこその問題であるが、協議会の時間設定が難しい。もう少し長い時間をとりたいとどのメンバーも考えていると思われる一方、短い時間であるからこそ多様なメンバーの参加が可能になって、密度の濃い協議会になっている可

能性もある。この点は、関係諸氏の判断に委ねたい。もう一点、多様なメンバーについて上述の通り良さが認められる一方で、ジェンダーの側面なども含め、今後よりいっそうの多様性を担保していくことが重要であると考える。また、以下は課題というよりもリクエストになるが、学校運営協議会やスクールパートナーズの方々にも、教員研修の様々な場面に参加していただくことも検討してみるのはいかがだろうか。授業づくりをともに学ぶことは、きっとよい影響をもたらすと思われると同時に、多様な児童生徒の学び方については、教員には見えていない視点、地域だからこそわかる長期的な視点などをお持ちの方もいらっしゃるはずである。項目2.4でも述べたように、こうした方々から学ぶ機会も設けることも考えてみたい。

**根拠**：学校運営協議会（12月）の参観、「学校運営協議会資料　美麻小中学校教育用語集」および同添付資料、名簿

### ３．２　学校に関する情報提供の状況

・学校はＨＰを活用して日常的に教育の成果を発信している。

・学校運営協議会は学校と地域の協働の様子をコミュニティ便りで地域に発信している。

**評定**：S

**評価**：HPを通じて、日々の教育の成果は十分に発信されている。回数としては、平均して月 1 回あまりのペースが保たれており、内容についても、行事の報告にとどまらず、学習する児童生徒の様子をうかがえるものとして工夫されている。地域と学校の協働の様子については、「広報みあさづくり通信」（月刊）がその役割を果たしている。とくに素晴らしいのは、この充実した内容の誌面が、教員と地域の方々との協働で製作されている点である。とくに今年度は、コロナ状況下で「元気アップ」の体操を動画配信するという試みもあり、地域、家庭、学校の一体感に貢献している。

**今後の課題**：学校HPと美麻Wikiとの関係が、初めて訪れた人にはわかりにくいかもしれないと感じられた。地域と学校が渾然一体となっているのが美麻のよさでもあるが、一般の人については、見やすさ、わかりやすさも検討課題になるかもしれない。

**根拠**：学校HP、美麻wiki

### ３．３　地域学校協働活動の状況

・学校は社会に開かれた教育課程を編成して地域住民との協働により教科や総合的な学習の時間の学習指導を行っている。

・地域学校協働活動の一環として放課後子ども教室が組織的に行われている。

評定：S

評価：総合的な学習の時間や生活科およびその他多くの活動場面において、スクールパートナーズをはじめとする多彩な方々が参加している。そのことが地域の活性化と一体となって成果をもたらしている点で、美麻小中学校の取り組みは貴重なものである。また「放課後学習支援」や、今年度から開始の「放課後子どもチャレンジ教室」の取り組みも、着実に成果を挙げつつある。

今後の課題：課題というよりも今後の期待として、様々な活動の中で、未来のコーディネーターが育つ可能性を感じた。活動ごとにサブ・コーディネーターのような役割を担っていただくことで、次のコーディネーターになるための学びになるかもしれない。

根拠：「第２回美麻学校運営協議会　資料」